

題材「イレギュラーの物語」における題材論的方法の研究 題材論的方法と絵画療法の教育的作用の連関を求めて

Research on Thematic Approach via the Theme “A Story of Irregular” In Pursuit of the Pertinent Educational Functions of the Thematic Approach and Art Therapy

立原慶一

題材論的方法とは知性的題材に動機づけられた形で行う、想像画的制作法の謂いであるが、その種の絵画制作の社会的意義を問うために、最近、目覚ましい成果をあげている絵画療法的行為との関係に着目する。その共通性と相違性をあらわにして、関連構造の究明を課題とする。そうした視点から、「癒し」的な側面が内在されているような題材、すなわち心理的葛藤や鬱積された感情を浄化するような、「イレギュラーの物語」を絵画療法の課題とすると同時に本絵制作の題材に設定し、平成 14 年度宮城教育大学とH大学芸術学部の学生 112 名を対象として実践してみた。

とりわけ心理的な葛藤や鬱積した感情は絵画療法時のスケッチに現れるとされるが、それがその後における美術的活動に対してどのように作用するのか。いわば制作過程でそれが質的にどのように変換され、あるいは充実することで美術的活動がいかに達成されるのか、を究明することにする。そうした方法によって、絵画療法と題材論的方法の違いを明らかにしようとする。

自己の心理的精神的なあり方や、この場合はこのように振る舞うべきだという善悪の倫理意識における違和感について、大学生は普段から意識することがなかったようだ。生きることにおける違和感はある意味で絵画療法の課題と題材論的方法の題材とされたのだが、それは約半数の学生によって単に意外感としか捉えられなかった。彼らには社会や文化（ここでは生活の仕方や人とのつきあい方、基本的な知識の謂い）において、自己の個性的なあり方や自立性を否定的な形で自覚する場面が、与えられなかったのであろう。

言い換えれば、欲望の自然な表出が大人社会の価値規範の壁にぶつかって、そのリアクションを内在化させていく機会が、現代日本の学校教育においてはその教育過程にあまり組み込まれていなかったか、あるいはそれを阻害する要因が含まれていたと見られる。このことが図らずも判明した点は、本研究におけるもう一つの成果と見なしてよい。

それはとにかく制作者は画面に首尾よく実現された主題形成（主題表現に成功し、作品から感じ取られるべきもの）や、その表現性に触発されて生じる美的内容を見つめることで、生（生きること）や世界との関係の意味を高揚が伴われた形で感受した。それはもとより感動の内実を形づくるものである。かくて学生は今後、精神と生活においてどうありたいのか、の自覚に到達したように思われる。顧みるに絵画療法は癒しと浄化を専らとし心的秩序を安定化に導くが、それに対して題材論的方法は手応えのある日常をもたらすなど、結果的に社会生活を充実させることによって、実践的な有効性が発揮される。この点が互いに異なるのである。